

ドキュメンタリー映画と「気づく力」の関係性 —ケア専門基礎教育における試み—

長谷川 美貴子

（2017年10月7日受理）

要 旨

看護師や介護福祉士が行っているケア実践においては、相手の状態や気持ち、そのできごとの意味に「気づく力」が必要である。ケア専門基礎教育における実習場面で学生は他者との対面圧力によって過度に緊張してしまい、気づく力の高次化には到り難い。そのため、「気づく力」を高める取り組みとして、学内講義の中でドキュメンタリー映画の視聴が効果的ではないかと考える。ドキュメンタリー映画（観察映画、記録映画）が教材として適している特徴としては、①現実世界が複雑なまま映し出されている、②学生は観察する行為に集中できる、③映像には監督の視点が含まれているため、観察の幅が広がるなどがある。さらに、学生のレポート記述の内容分析によって以下のことが明確になった。1）複雑で両義的な状況に気づくことができる、2）登場人物の感覚を自分の身体を通して気づくことができる、3）登場人物への認識が変化し感情移入を体験できる、4）自分の偏見に気づき、登場人物の感覚の広がりを感じることができる、5）登場人物の生活と自分の生活を比較し、両者について俯瞰的に捉える姿勢が養われることである。学生は気づいたことを自由に書く作業を行うことによって、自分の体験を可視化し再構成することになる。このように、自分の気づきを自分で評価することは、学生自身の成長する力を高めることにつながると考える。

キーワード 気づく力、ケア、ケア専門基礎教育、ドキュメンタリー映画

I. はじめに

他者の日常生活行動を援助するケア実践者（看護師や介護福祉士など）の専門基礎教育において大切なことは、その援助の根本原理であるケア概念の明確化を図ることといえる。ケアとは一般的に、気遣い、配慮、思いやりといった言葉で表わされることが多いが、「ケアは看護の本質であり、看護の、明確で優先的な中心をなす統一的な焦点」¹⁾であり、看護は常にヒューマンケアというスタンスをとっており、実践の場面ではケアリングが扇の要のような位置にある²⁾。日本看護協会の見解においても、「ケアは看護職の行為を本質的に捉え

1

ようとするときに用いられる、看護の専門的サービスのエッセンスあるいは看護業務や看護実践の中核部分を表すもの³⁾と明記されている。また介護領域においても、1970年代から「コミュニティ・ケア」「在宅ケア」「ケアワーカー」「ケアマネジメント」「認知症ケア」のようにケアという用語によって介護を表現し、介護概念とケア概念は「ほぼ同意語であると考えてさしつかえない」⁴⁾といわれている。

だがしかし、ケア／ケアリングの定義は「いまだ十分明確ではなく合意も得られていない」⁵⁾現状にあり、未だに議論が続けられている⁶⁾。よって、本論文においてはケア行為の端緒に存している「気づく力」に着目してケア概念について考察していく。気づく行為には、相手がどのような状態・状況にあるのか、あるいはどのような気持ちでいるのか、何を考えているのか、どのようなニーズがあるのか（どうしたいと考えているのか）、何を大切にしているのか（価値観）といったさまざまな事象が含まれる。ケア行為を行うためには、このようなことがらに関心を持ち推論できなければ、ケアの実践は立ち現れてこない。ケア実践のためには、他者の視点に柔軟に気づき理解する能力が必要であり、そのために感性や想像力を高める教育が求められている⁷⁾。ケアにおける「気づく力」をケア専門基礎教育の中で高めることはいかにして可能であるのかを問いながら、ケア概念についてさらなる明確化を目指そうと考える。今回は特にドキュメンタリー映画を活用することによって、「気づく力」を引き出し得るかについて検討をしていく^{注1)}。

Ⅱ. ケアと「気づく力」の関係性

1. 適切なケア実践に必要な気づく力

ミルトン・メイヤロフは「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけること」⁸⁾であると、ケアの大前提を明言している。さらに、「ケアの相手が成長するのをたすけることとしてのケアの中で、私はケアする対象（一人の人格であったり、理想であったり、思いつきであったりする）を、私自身の延長のように身に感じ取る」⁹⁾ことが行われていると説明している。つまり、ケア実践の場合にはまずはケアする対象を、自分とは異なる存在でありながらも、自分とつながっている存在で、あたかも自分のことのように身に感じ取ることができなければならない。相手を「感じ取る」ためには、相手に関心をもち、あらゆる情報を多面的に収集しながら、それらを「自分の身体」を通すことによって感じられねばならない。

フローレンス・ナイチンゲールも「自分自身は決して感じたことのない他人の感情のただ中へ自己を投入する力をこれほど必要とする仕事はほかに存在しない（中略）その顔つきに現われるあらゆる変化を読みとれること、これこそ看護婦のABCなのである」¹⁰⁾とケアの本質を述べ、さらには「もしあなたがこの力をもっていないのであれば、あなたは看護から身を退いたほうがよいであろう」¹¹⁾と断言している。つまりケアを実践する者は、複雑で最も捉え難い他者の情動や感情の中にですら、自分をそのまま無防備に入れ、相手と呼吸を合わせ同じ空気を吸うような感覚で相手を感じ取ろうとし、あらゆる変化を見逃さないだけの観察

力や洞察力が養われていなければならないといえる。人間にとって最も根源的な欲求である「愛」の概念の中にケアが含まれていると論じるエーリッヒ・フロムも、「愛に配慮（care）が含まれていることをいちばんはっきりと示しているのは、子どもに対する母の愛である。（中略）愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかける（active concern）ことである。この積極的な配慮（active concern）のないところに愛はない」¹²⁾と述べ、ケアは関心をもって気にかけることから始まると説明している。

相手の気持ちや考え、思いに気づく場合、自分とその価値観や状況が似通っていればある程度推測し予測することも可能であろうが、ケアの対象は自分が経験したことのない怪我や障害、病気を抱えているという、自分とは異なる状況を生きているので、簡単に把握することはできないであろう。まずは、相手を「そのまま受けとめる」という構えが必要となる。一人ひとりのさまざまな価値観を尊重し認めることで、はじめて相手の感情や感覚、考え方に近づけるようになる。相手を理解しケアを行うために、どのように相手と対峙していけばいいのかは、多くの実践家が考え続けているテーマであり、たとえばヴァージニア・ヘンダーソンは「何を欲しているかのみならず、生命を保持し、健康を取り戻すために何を必要としているかを知るために、彼の“皮膚の内側”に入り込まねばならない」¹³⁾と述べている。相手の考え方や感じ方に近づき触れるためには、外側から見るだけでなく、身体の内側、しかも、すっかり中に入り込むという感覚ではなく、外部と内部の境界線である皮膚の内側に入り込み、外部からの刺激を受け、微妙に内側が変化しバランスを保とうと複雑に揺れ動く感覚に触れることによって、相手の状態にはじめて気づくことができる。つまり、自分の身体を介して相手を感じるによって、さまざまなことに気づくことができるようになると思う。

2. 「気づく力」を引き出す教育の必要性

他者をケアするためには、この気づく力がなくてはならないものといえるが、気づくという察知する能力は果たして学校教育によって引き出し高めることは可能であろうか。可能だとすれば、ケアの対象と直接関わることでできる施設での介護学実習での学習が適しているといえよう。だが、コミュニケーション能力の低下が指摘されることの多い最近の学生の様子をみると、そうした環境に身を置いても、自分自身の力でこのような能力を高めていくことはかなり難しいことが複数の研究によっても明らかにされている^{注2)}。新しい環境に入ることや、初めて出会った人と対面すること、新しい複数の課題に 대응することは、かなりの緊張感を生み、まずはその緊張という圧力に耐えることに全精力を傾けざるを得ない状況が生じている。実習中の学生の心の動揺については、「自分がその場に居合わせてどう立ち振る舞えばいいのか困っている」¹⁴⁾様子や、人間関係に基づくコミュニケーションスキルの未発達な学生が目立つ中、そのまま実習という形で援助関係を迫られる現状¹⁵⁾もあると記されている。したがって、実習に行きさえすれば、あるいは他者と接する機会を設定すれば、自然に「気づく力」が強化されるわけではないことが容易に予想される。ケアの対象や職員の様子を観察することで、自由に感じ、自ら気づき思考をめぐらせることができるようにな

るためには、実習に行く前にある程度の水準まで「気づく力」を高めておくといった事前の準備が必要だと考える。

対象に対して関心をもち、集中して観察するということを体験しておかないと、複雑な現実世界における膨大な情報から、対象に関する情報を詳細に獲得することは、かなり困難なことであろう。また、気づくためには「どうして、こういう表情をしているんだろう」と自ら問いかける姿勢、あるいは「自分は今、こんなふうを考えている、感じている」といったことを内省的に振り返る時間が必要である。日々の生活体験が乏しい場合には、体験した出来事からさまざまな「意味」を見出すことにも慣れていない状況にあるといえる。だが、ケアを行う専門職は対象の状態を正しく把握し意味を見出していくことができなければ、適切な援助を行うことは不可能である。対象の様子を観察して、学生自らが感じ考え判断していく洞察力が必要なのである。

その意味で、実習前に学校の教室の中という、臨床よりは緊張しない環境において、自分と他者とを安心して対峙させる体験が必要であり、その体験を客観的に振り返るトレーニングを何度も行うことが大切である。自分と他者を現実に近い自然な形で対峙させるためには、ドキュメンタリー映画の活用が有効的ではないかと考える。本研究の目的は、ドキュメンタリー映画を視聴することによって、「気づく力」をどの程度引き出しうるのか、どのような種類の気づきを引き出しうるのかを明らかにしていくことである。ドキュメンタリー映画は、俳優がセットの中の決まった場所である人物を演じるという劇映画（フィクション映画）とは異なり、実際にそこで生活し生きている人たちを、生活しているその場所で撮影したものである。つまり、「さまざまなことが同時に生起している日常生活の複雑性」をそのまま写し撮っており、情報量の多い普段の生活環境に近い形で学生に提示できるので、観察力や「気づく力」を引き出す教材として適していると考えられるためである。

Ⅲ. ドキュメンタリー映画の教材としての有効性

1. 質的記述的研究

看護学生や介護学生といったケア専門職をめざしている学生に対して、「気づく力」を引き出す目的でドキュメンタリー映画を活用する教育の模索は4年程前から行い始めている。ドキュメンタリー映画の鑑賞後にリアクションペーパーやレポート課題を出し学生の「気づく力」に変化があるのか、さまざまな映画を試みており現在も続けている。本論文の研究対象は看護学生（3年課程）80名分で、新入生セミナーという入学して間もない頃（4月）に行った学生レポートを分析対象としている。

2. 倫理的配慮

分析資料は、学生のリアクションペーパー（レポート）の内容を研究者がポイントをまとめ再構成し、そのレポートは学生に返却している。その資料を今回の研究のためにさらに再構成し直している。よって、学生が実際に記載した用紙は使用しておらず、個人情報が特定

できるデータも使用していない。研究に使用することに関する説明は口頭と文書によって当学生に伝えており、個人情報の保護に努めること、本人の不利益にならない配慮を行うこと、使用の拒否については申し出て、それに対する不利益は生じないことを説明している。新入生セミナーでのリアクションペーパーであり成績には関係しないものでもある。さらに、当学生の所属する看護学校の倫理委員会で承認を受けている。

3. 教材としてのドキュメンタリー映画の特徴

1) 複雑な現実世界が映し出されている

一般的にドキュメンタリー映画とは、劇映画よりも事実性の高い映画を指している。というのも、ドキュメンタリー映画で映し出されている映像は現実には起きている出来事であり、登場人物はそこで生活し生きている当事者本人であり、本人の言葉は本人の生の言葉であり、事前に決められている台本によるものではない。ドキュメンタリー映画にもさまざまな種類はあるが、記録映画、観察映画と称しているドキュメンタリー映画は「撮影前に台本を作らず、目の前の現実を撮影と編集を通じてつぶさに観察し、その過程で得られた発見に基づいて」¹⁶⁾ 映画を作成しているので、現実の世界を直接的に見ることができる貴重な資料と捉えていいのではないかと考える。

専門的な映画理論に基づく厳密な定義や枠組みについては、ここで詳しく論じる準備はないが、鑑賞者としての視点から有効性を述べていこうと考える。ドキュメンタリー映画の特徴としては、現実には起きている日常をカメラに収め、実際の様子（風の音や陽の光、さまざまな音）がそのまま写し撮られているため、その場の空気感や匂いといったものにも、能動的に触れることができる。さらに言えば、ドキュメンタリー映画はその対象を長回しで撮影することも多いため、撮影者が撮るつもりもなかった映像（登場人物の何気ない表情やしぐさ、一瞬の視線、主人公以外の人たちの動き、小動物たちの動きなど）や音（声の調子や抑揚、ドアの閉まる音、息遣い、食器の音など）の一つ一つが同時的に撮られており、ありのままの情景がリアルに感じることができる。いわば実際にそこで生活し、生きている人たちの、生きているスピードのまま映し出されているのである。

このように、毎日、淡々と繰り返される日常的で自然な営みを映しているドキュメンタリー映画を視聴する体験は、鑑賞する者がその世界に入り込みやすいともいえる。まるでその場に一緒にいて、同じ空気を吸い、皮膚や身体感覚で感じたり、同じできごとを体験し、同じ時間を過ごしているような感覚になりやすい。つまり、時間の流れを共有する一体感が生じるため、能動的に映像や音から自由に観察したり、感じたりすることが可能といえる。

2) 観察する行為に集中できる

日常生活の場面において、相手の顔や動作だけを直視し続けて観察することは不可能であろう。対面していて、そのように観察することは相手を緊張させてしまうことになり、日常的で自然な会話や本音を引き出すこともできず不自然な状態になってしまう。しかし、映像を観察する行為は、不自然なほど集中して観察し続けることもできるし、さらに繰り返し観

り返し観察することも可能である。見落とした表情や言葉を再生し直すこともでき、全体を通して何度でも観察することもできる。またそのことによって、同じ映像を視点を変えて見ることもできるため、登場人物の感情や気持ち、考えにより近づきやすく、新たに気づいたり発見する可能性も高くなる。

また現実の世界では、他者と同じ場所に自分も存在しているので、自分に向けられた相手からの視線や反応などによって、自分の感情が揺さぶられてしまい、冷静で客観的な観察が難しくなってしまう。会話をしながらの観察であれば、慣れていない会話に集中してしまうので、なおさら十分な観察は難しくなると考えられる。ドキュメンタリー映画を視聴しながら、他者の様子を観察することは、対人関係による緊張などに煩わされることなく、集中して十分な観察をすることができるので、リラックスして自由な発想、柔軟な思考も引き出されやすいと考える。

3) 監督の視点も加わり観察の幅が広がる

ドキュメンタリー映画は現実の世界をありのままに撮影しているとはいえ、やはりその映像には監督が何に関心を持ち、何にカメラを向けているのか、どこから見ているのか、どこまで追いかけて見続けていくのかといった監督の視点も存在している。つまり、複雑多岐でとらえどころのないような現実世界を映してはいるが、現実世界よりはやはり焦点化され、一つの作品に仕上げられている。ありのままの日常を映していることには変わりはないが、全く漠然とカメラを回しているのでもなければ、一つの作品にするための編集作業を監督は行っている。だからこそ学生が現実世界では情報量が多すぎて、関心が分散してしまい、何かに集中することが難しくなってしまう状態でも、ドキュメンタリー映画を視聴することにおいては現実世界よりは情報量が縮減されており、集中して何かを観察しやすいのである。

視聴者は映像を観て自由に感じたり考えたりしていくことが可能であるが、その映像は監督の体験したことが映像化されているので、監督の感性にも触れることができる。言い換えれば、監督は撮影しながら、その場でいろいろなことを感じ考えながら撮っているので、自分の存在を排除しようとしながら撮影しているであろうが、かすかで微妙な監督の感覚、感性などもそこに映し込まれていると考える。「監督はこのように感じているのかな（考えているのかな）」、「私はこう感じるなあ（考えるなあ）」、「じゃあ、登場人物はどのように感じているんだろう（考えているんだろう）」と、観察や視点の幅が広がり、さまざまな「気づき」を生むための教材として最適と考える。かすかな監督の感情をも読み解く事ができたら、さらに楽しくなっていく、その場面に対する、あるいはその登場人物に対する認識が、相乗効果的にさらに深まるであろう。

イ・スンジュン監督は、「ドキュメンタリーとは、実際に生きている人の中に入っていけないといけない。私的な空間に入っていくわけですから、“監督”と“撮られる側”ではうまくいきません。理解することを“頭”ではなく“心”で行う努力をすること。ドキュメンタリーの監督として、真実を伝えることが大切だと思っています。真実というのは、相手を尊重してこそ出てくるものだと思います」¹⁷⁾と語っている。つまり、ドキュメンタリー映画は

真実を伝えるために個人的な私的空間に入り、表面的なことではなく本質を写し取ろうとしているものである。相手を尊重するということは相手の目になり、相手の耳になり、相手の皮膚になって、その存在や価値観そのものに敬意を払いそのまま受けとめることといえるので、監督の目というフィルターを通していても、そこには心で理解しようとしている映像や音が映し出されているのである。だからこそ、実際の風景やさまざまな出来事が起きている複雑な日常や、日々を生きている実際の当事者の声や言葉から、場面場面を集中して観ることができ、そこからさまざまな方向で感じ考えることが可能となる。

4. 使用したドキュメンタリー映画

韓国の監督イ・スンジュンが撮影も自ら行った長編ドキュメンタリー映画『渚の二人』を使用している。原題はPlanet of Snailで2011年に発表された87分の映画である。内容は、韓国のソウル郊外に住む一組の夫婦の日常を2年間にわたって追ったドキュメンタリー映画である。夫ヨンチャンは幼い頃に視力と聴力を失い、触覚でしか外の世界とつながることができない。妻スンホは幼少の頃に脊椎障害を患い少し小柄である。二人のコミュニケーションは指点字（両手の6本の指を点字の6つの点に見立てて、指で点字を打つ）を使っている。目も見えず耳も聞こえないという孤独の中、触れ合うことで心を通わせる夫婦の愛を描いている。視覚障害と聴覚障害をもつ夫の日常が映し出されているので、学生にとっては全く未知の世界、未知の感覚を味わうことができるので、気づく力を引き出す目的に適した映画と考え選択した。さらに、二人のやりとりは言葉だけに頼らず「触れる」ことから生まれる豊かさが感じられる映画であるため、人間に対する深い洞察力も養われると考えた。

さらに、この映画はナレーションを一切入れていないという特徴がある。ドキュメンタリー映画にはナレーションの付いている作品もあるが、ナレーションがあると、視聴する私たちの感覚や感情、思考がその説明に無意識に左右されてしまう可能性が生じる。自ら気づく力を高めるための教材であるため、ナレーションのないこの映画の視聴は、学生にとって自由に感じ、自由に考えるためには適切なものであると考えられる。

IV. 学生レポートの内容分析と考察

ドキュメンタリー映画の視聴前には、とにかく登場人物の感覚や感情を味わうように伝え、感じたことを自由にリアクションペーパーに書くことを指示している。内容分析では学生レポート内に記載されているテキストの抽象度を高めるため、文字化されているデータから注目すべき語句を取り出した。語句を取り出す際には、意味が変化しないように学生の意図や全体の流れを把握することを重視し、語句、文節、文章、段落ごとに吟味を繰り返しながら内容抽出を行った。さらにそれを説明するための概念を追記しカテゴリ化を行い、全体を表すコードを割り当てるといった作業を行っている^{注3)}。

1. 多義的で複雑な感情に気づく

ほとんど全ての学生が記述していた内容は、「二人の支えあう姿に愛を感じた」「二人の絆が見えた」「障害があっても関係なく愛によって乗り越えられる」といった二人の親密な関係性に感動したという内容や、「二人がとても楽しそうに生活している」「希望を失わず、幸せそうである」といった、『二人がとても幸せそうで羨ましい』という内容であり、もう一つは「障害があると日常生活の一つ一つが大変困難で時間がかかる」「些細な行動も危険が潜んでいて不安を感じていた」「私たちが経験したことのない恐怖心がある」「障害者はさみしいという感情を強く持っている」「孤独に生きていることに心が痛んだ」といった『二人が感じている寂しさや不安感』についてであった。羨ましいほど幸せに暮らしていると強く感じながらも、二人の孤独で不安な気持ちも感じるという、人間の複雑な感情に触れ衝撃を受けている内容が多かった。そうした複雑性に気づいたからこそ、自分には二人のことを捉えきれないと気づき、「障害者の気持ちをまだ十分には理解できていないけど、理解する努力を続けていきたいと思う」といった記載も多かった。心の中にはさまざまな思いが重層的に存在していることを感じ、簡単には理解できないことに気づかされている。

2. 二人の感覚を自分の身体を通して感じている

「松の木に触れて匂いを嗅いで抱きしめて、人と接するように会話をしていた」「一緒に感触を確かめている気分になり、ゴツゴツしたり匂いがしてきた」「普段、視覚に頼っている自分はたくさんのことを見落としていると感じた」「雨のしずくを指先で感じ、その弾力や冷たさが伝わってきた」と、今まで自分が感じたことのないような繊細でかすかな感覚を映像の中の登場人物とともに味わっているような記述が多かった。また、「松ぼっくりを手の中で転がしたり、投げる、それら一つ一つの動作がとても新鮮なものに感じた」「電灯交換を二人でやり遂げ喜ぶ姿が印象的だった。ありふれた日常的な行為なのに、とても新鮮な光景だった」と、日常的に自分が感じている感覚とは「異なる感覚」を体験し新鮮で不思議だと述べている。集中して観察することによって、視覚的情報によっても相手の身体感覚に近づくことができる体験をしている。

また、「ヨンチャンは全身を使って頭の中に自分のイメージを作っているんだろうなと思った」「指点字はすごく神経を集中させると思うので疲れると思う」のように、視覚的には見えないことがらについても、想像して感じとっている。たとえば、見えていない世界をどのようにイメージしているのだろうかと想像して考えたり、映画の中では指点字は疲れるといった説明はなく、疲れている表情も出てきてはいないが、二人のやりとりを観ながら“見えないもの”について感じとることができている。

それだけでなく、「何も見えず聴こえない、光や音のない暗闇の世界で、感覚だけで生活するって、どのような世界なんだろう」「星を見たことはないけれど疑ったことはないというヨンチャンの言葉は、同じような境遇にならないとわからないものだなと思った」というように、二人の感覚に触れ感じることでできた分、二人の感覚には到達していないことを自覚することができている。

3. 二人の感情を類推しながらリアルに感じている

「はじめは妻が夫の精神的な救いになっていると思っていたが、見ていくうちに妻の方が夫に精神的に頼っていることが見えてきた」「友人が遊びに来て握手をしてきた時、ヨンチャンは緊張した表情だったので、誰かわからず不安なのではないかと思っていたが、もしかしたら手に集中しているのかもしれないとも思った」「二人の生活は不自由で乗り越えることが大変そうと思っていたが、二人にとってはこれが現実であり、乗り越えるとか乗り越えないといった感覚はないのかもしれない」というように、二人の気持ちを理解しようとして集中して観察し、自分の中で考えながら見ているので、さまざまな視点から捉えられ、感じ方や考え方が変化しているのではないかと考えられる。

また、指点字に関心を示す学生が多く、「二人の手と手が触れあい、心が生まれている」「言葉より手の方が気持ちが伝わるように感じた」「手だけでこんなに気持ちを伝えられるなんて思いもよらなかった」と手と手の触れあう様子や二人の手の動きから、お互いに相手を思いやる気持ちを読み取っている学生が多かった。二人の手が触れ合う感覚を学生自身も感じ取り、そこに豊かな感情を見い出している。「声は聞こえないはずなのに、まるで普通に会話しているように見えた」「二人が見つめ合っている姿が印象的で、まるで見えているように感じた」と見えていないはずだし、聞こえていないはずだけど、目には見えない、音としても聞こえない二人の会話を、二人が行っているままに感じているようであった。二人のやりとりの行間を埋めながら捉える洞察力が引き出されているのではないかと考える。

「はじめて海辺に行きヨンチャンが『ザーザー』と言い、とてもうれしそうな表情をしていたので、『聞こえた！』と思い、すごく嬉しくなった」「ヨンチャンが外出し、スンホが一人で家にいる時、スンホの寂しい気持ちが痛いほど伝わってきた」「二人は一緒にいることが当たり前だったので、離れると落ち着かないのかなと思った」「悲しげな顔をしていて心が苦しかった」「ヨンチャンが帰ってきた時、スンホはすごく嬉しそだったので、私まで嬉しくなった」「一緒に死んで一緒に天国に行こうと二人で話しているのを見て、悲しくなった」「スンホに先立たれたら、ヨンチャンはどんなさみしさを抱くだろうと、正直辛くて想像したくない」と二人の感情にまるで同化しているように、学生自身の感情まで動いていることがわかる。ある場面では妻の感情を体験し、また違う場面では夫の感情を体験しており、視点を変えてそれぞれの感情を感じとることができている。

4. 今までのイメージが変容し、関心を広げている

「障害があると、みな暗い気持ちになると思っていた」「障害のある友人が皆とても明るくて驚いた」「障害者の見方やイメージが変わった」「重い障害があり不自由でも幸せを感じていて、幸せって何だろうと考えさせられた」と、障害のある人と関わったことがない学生でも、映像を観るだけで実際に接しているように、現実感をもって感じているようであった。そして、障害があっても何かができないという困難な側面に気づくだけでなく、「目が見えないのに粘土で繊細な形の人形を作っていて、手や指先の感覚の鋭さに驚いた」「視覚と聴覚に障害はあるが、それ以外の感覚がとても鋭い。相手の心も感じている」「手に触れただけ

で相手が誰であるかわかるほど感覚が鋭い」と、他の感覚の鋭さに気づき、自分にはない感覚の多様性に驚いている。

また、映像とこれまでに会った障害者のことを思い出し結びつけながら、その人の様子や感覚について記載している学生も複数おり、「障害のある友人にもぜひ観てもらいたい」と、この体験と一緒に共有したいという思いが感じられる。この映画を観ることによって、今までは理解できなかった、障害のある友人の感覚や気持ちに、少しは近づくことが出来たような感覚を持ったので、一緒に観たいと考えているのかもしれない。さらには、「障害者の書いた詩や本を読み、もっと知りたいと思った」「障害ある人も私たちと変わりなく、いろいろと感じている。障害って何だろうと考えるきっかけとなった」のように、新たな視点や疑問が生じ関心の幅の広がりが生じている。

印象に残ったと書いている記述には、「視力も聴力も障害しているから、はっきりとした思い出や記憶がない」「現実の世界で見たことがないものは夢でも見られない。夢の中でも盲ろう者」「盲ろう者は宇宙空間に一人にいるようだ。盲ろう者は宇宙人だ」「ずっと霧がかかったように不透明な世界で、濃い霧の中で生活しているよう」というものがあり、自分には推測できない感覚や世界に出会い、消化できずに衝撃を受けているように感じる。特に、思い出や過去の記憶がないということに対して、心のよりどころがない恐怖を感じ、とまどいを感じている学生も多かった。

5. 自分の生活と比較し客観的に思考している

「電球を変える時に、夫は目が見えないのでとても困難な作業になり、私たちだったら二人でいらいらして、教え方が悪いとか、無理だとか言って喧嘩になりそうなのに、二人は違ってた。できるまでやり続けていてすごい。我慢したり耐える力が強いのか。なぜ、前向きでずっといられるのだろう」「目が見えなければ、耳が聴こえなければ楽しくないだろうと思う事でも、二人は楽しんでいてすごい。たこあげをしている場面で、一生懸命にうまくあげようと二人で考えてた。私たちならいらいらしてやめてしまいそうなことでも楽しんで」と、精神的に安定し落ち着いている二人の様子を見て、自分たちの日常生活では、すぐにいらいらしてしまうことと対比させて考えることができています。さまざまな障害を抱えていて、自分たちよりも不自由なことや辛いできごとが多いことを、この映画を観て具体的に再確認しているからこそ、いらいらせず楽しんでいる二人に「すごい」と驚いているのではないだろうか。

一方で、「互いがいないと心に穴が開いたようだと、二人で伝え合っているところが印象的だった。私たちはあまり素直に自分の気持ちを伝え合わないが、私たちももっと言葉で伝えていくべきじゃないかと思った」と、自分の気持ちを上手に相手に伝え合うことができていない自分たちについても捉えられている記述もある。そこではコミュニケーションをとることが難しい二人なのに、自分たちよりも上手にコミュニケーションをとっていることに気づくことができています。

また他には、「友人たちと会話している場面で、夫の表情が変わらないので、怒っている

のか楽しんでいるのかわかりにくかった。（……）目や耳が聞こえないので、空気や気配を感じようとして集中しているのかもしれない。あるいは、私たちが他者を意識しすぎて表情をつくりすぎているのかもしれないとも感じた」と、自分たちとの表情の違いに気づく学生もいた。そこから、自分たちは他者の視線や表情、反応を気にしながらコミュニケーションをとっていることにまで考えを広げている。こうした対比と客観的に自己を見つめることが可能となっているのは、他者の感情や感覚をリアルに受けとめられ、自分との違いの意味を探ろうとすることができはじめている証ともいえる。

V. ドキュメンタリー映画視聴と自由記載レポートの効果

1. 気づく力を養うためには自分で、その場面に意味を見い出すことが重要

「二人の気持ちを感じてください。二人の感覚に集中して十分に感じてください。そして、何を感じたのかを自由に何でも書いてください」と、感じたままに気づいたことを何でも書くという課題に対して、学生は自由な観点から思い思いに記載していた。自由に記載する課題は、能動的な作業に苦手意識を感じている最近の学生にとって、「何について書けばいいかわかりません」という反応になりやすいが、二人の感覚に集中することによって、すべての学生が白紙のA4用紙にびっしりと記載することができていた。

自分の感じたまま、ありのままに書いていく作業は、自分の感じたことや考えたことを安心して排出できる場となる。それはまた文字になって現れてくるので自分で可視化でき、自分の感性や感覚を振り返り認識しやすくなる。学生の記述を読むと、書いていくうちに学生自身の考えがダイナミックに拡張・変化していくことに気づく。たとえば、登場人物の状態について書き始めていても、二人の気持ちを推論し出したり、自分のこととして考え出したり、また自分の実生活で体験した出来事を思い出し、そのことについてアセスメントしたり、障害って何だろう、人間の幸せって何だろうと主体的な姿勢で自分自身の関心の広がりがみられている。また、もっと障害者について知識を増やしたいというこれからのことについて記載するなど、多方向に向かって自由に思考が広がっているのが感じられた。自分の感覚や感情、考えが文字化することによって明確になっていき、登場人物の行動や発言にも意味があることに気づいていく。つまり、自分の気づきに自分で気づくことによって、「気づく力」は能動的に強化されていくのではないだろうか。

「気づく力」が弱い場合、気づくためのある程度の視点を提示することは必要であろうが、いつまでも提示し続けていては、新しい場面に遭遇した際に推論して自ら気づいていくことはできない。「気づく力」は外部から強制的に注入されて育つものではなく、自らが気づき、発見することによってしか高まっていかないであろう。自分自身の他者を見る視点や感覚を可視化していく作業によって、はじめてそうした能力は成長していくと考える。人間が成長していくためには、「意志ある学び」が大切であろう。こうした学習者主体の教授方法について研究を続けている鈴木は、意志ある学びの実現のための「プロジェクト学習」という方法を提言している。その特徴として、行ったことの「成果や成長」が見えること、静かに自

分を見る自己評価の時間をもつこと（その評価の時にこそ価値を見出すことができる）、創造することは喜びであり、知の創造や自由の表現ができる「創造的なとき」を組み込むことが重要である¹⁸⁾と述べている。

学生の記述の中には、「もっと知りたい」「不思議だ」「すごい」という言葉が頻出しており、自分が発見したからこそ主体的な関心が高まっていると感じる。「気づく力」を高めるためには、他者評価を気にせず（他のことに気を取られず）緊張しない環境の中で、自由に感じる事が重要であると考えます。また、自分の考え、感じたことを客観的に捉えることができるのは、他の視点や全体を捉える視点をも取れるということである。複数の視点を持つことで、自分の感じたことがらにはこうした意味があるのではないかと、自分で発見することが可能となる。自分の感じ方を全体を通して客観的にみるという作業は、ポートフォリオでいう「俯瞰」¹⁹⁾と一致する。鈴木は、われわれが成長するためには、自分自身の思考プロセスなどを俯瞰して可視化し、それを基に自己評価することによって、自己認識が高まるというプロセスが必要だ²⁰⁾と述べているが、全体を俯瞰しながら考えるという行為は、現代社会を生きる私たちにとっては、なかなか難しいことではある。というのも私たちは、その時その場での短いスパンの中で条件反射的に状況判断していくことが日常的に多いからである。映画を視聴して感じたことを、はじめはメモ的にばらばらの情報として記載していくが、その文章をもう一度読み返すことによって、自分の感じたことを一元化し俯瞰して見ることができ、ばらばらでは見えなかった自分の気づきが明確になってくる。このように、記載することの利点は、思考の可視化ができることといえる。書くことは、自分の感覚や思考、感情などを俯瞰してみる作業となり、自分の気づきを客観視することにつながり、自分の新たな気づきを顕在化することができる。鈴木は『自己評価』こそ成長への力²¹⁾と述べ、結果が重要なのではなく、プロセスからプラスを発見することの大切さ²²⁾を強調している。

つまり、自分の考えを文字化して書くことの意義として、「普遍化すること＝価値を見出すことは、とても力がある、言い換えれば『再構築』するときこの力がつく」²³⁾のであり、書くという作業を行うことは、自分の感じたことを再構築しており、そのことによって、感じたことの意味づけを行うきっかけになると考えられる。「いちばん成長して欲しいのは、『気づく力』や『事態の先を読む力』『相手の身になって考えられる心』などです。これらは、教えられて身につくものではありません。これらの力は本来、すべての人がもっている力なのです。それを引き出すことが効果的な成長へとつながるのです」²⁴⁾。この記述からも相手を支援する人間の成長にとって一番大切なことは「気づく力」といえる。「患者さんの顔に、何をみているか、何に気づくか。……患者さんのためらいの、何をみているか、何に気づくか。相手の仕草の、何をみているか、何に気づくか。自分の心の、何をみているか、何に気づくか」²⁵⁾の重要性を感じる。

2. 時間をかけて視聴することの効果

学生自身による記述が、登場人物の微妙な感覚や複雑な思いに気づくことができているのは、このドキュメンタリー映画の世界に学生が入り込むことができたことも一つの要因と考

える。この映画は長回しによって撮影されているシーンが多いため、登場人物が感じている日常生活の時間のテンポや流れそのものを肌で感じる事が可能となっている。映画視聴時間は87分間と、学生にとっては少し長い時間と感じられる。集中力が続くか心配であったが、ほとんどの学生が居眠りもせず視聴することができたのは、この世界に入ることができたからかもしれない。シーンごとに分けて視聴し、その都度解説しながら進めるという教授方法もあるが、今回重視したことは、自分で感じて、自分で気づくことであるため、長い時間をかけてゆっくり味わいながら学生に観てもらい体感してもらおうと考えた。学生は、日常的なできごとであるのに、とても新鮮に感じたり、登場人物の感じていることをまるで自分の感覚として感じる事ができていた。

「気づく力」の中には、今の状況を正しく把握する能力と、この先どのようなことが起きるだろうかという推察する力が必要である。自分とは異なる他者、そしてその世界や生活を理解するためには時間が必要である。今回の視聴ではその世界に自分の身を投入するための時間を設定することで、学生はさまざまな視点で気づくことができたといえる。登場人物と共に感じるによって、登場人物に関心を持ち、その人の思いをさらに知ろうとして、些細なしぐさや言葉にさまざまな意味を見出すようになったと考えられる。

VI. 結論

今回、ケアの実践の端緒となる「気づく力」を引き出す教育方法を見出すために、ドキュメンタリー映画視聴後の学生レポートの内容分析を行った。映画を視聴することによって学生は、現実世界や人間の感情の多義性に気づくことができ、今まで感じたことのない感覚に触れ、「気づく力」が高まっていた。また自分自身を客観的に見つめ思考を膨らませることができていた。また、書くという作業によって、自分の体験を可視化し再構築でき、さまざまな視点からの気づきができていた。しかし今回の取り組みで不十分な点は、学生の貴重な気づきを学生個々人の明確な目標へとつなげられていないことである。記載したものを、学生自身がもう一度吟味するという機会を設け、自分自身を俯瞰して見つめる必要があろう。たとえば、他者へのケアに役立つように、自分の「気づく力」を高めるためには今後どうすべきか、自分の「気づく力」にはどのような傾向があるのかを再認識していく時間が必要であったと考える。この学習を活かし、その時に感じたこと（部分知）を、俯瞰し自分自身を知るための全体知に再構築し、さらなる成長につなげることが必要であった。俯瞰する作業を何度も体験することによって、抽象的に考える能力も高まっていき、全体を見通し予測する力の育成につながると考える。

さらに気づきの高次化を図るためには、同じドキュメンタリー映画を2回視聴して、その都度そこで気づきをリアクションペーパーに記載する方法が考えられる。「気づく力」の成長は、自分自身の観察力や察知する能力の高まりであるため、他者と比較することはそれほど重要と考えられない。つまり、自分が自分の感性の変化を発見できるよう1回目と2回目の比較を自分で行い、その変化を前向きに捉えていく作業が必要である。気づく力を高め、

「人が成長するためには、欠点やマイナスを洗い出すことから始めるのではなく、優先してプラス面を見い出」²⁶⁾すことが重要であろう。つまり、自分自身と対峙する時間をつくり、気づきの変化を認識することが成長につながるといえる。こうした体験の積み重ねによって、次第に他者への関心も深まっていくと考える。だが2回視聴することの時間的制約と学生の意欲や集中力の問題から、いかに効果的に提示していくかという教員の準備の問題が発生する。学生が真剣に取り組めば取り組むほど、効果は高まるので、さまざまな領域で行い、この発見の楽しさを学生が体験することによって、学生の感性や観察力は相乗効果的に高められていくと考える。

本研究はケア実践における「気づく力」の高次化に関する検討であるが、ケアはケアを実践する側と受ける側の相互作用関係の中で成立するものであり、お互いに信頼しあうプロセスが必要である。ケアは両者の関係性が質的に変化することによって実現するもの²⁷⁾であるため、学内のワークだけで他者と対面しながらの「気づく力」が向上したと結論づけることはできない。また本研究の限界として小規模データであることが挙げられる。ケア実践の端緒にとって大切な「気づく力」には、単に知覚する能力だけではなく、相手に関心をもち、そこに到る過程や、これから起こる可能性のある未来を類推する力が必要であることが本研究から見てきた。今回の取り組みは実習という実践の場に出る準備段階としての教育であることに変わりはないので、実習にいかにつなげていくかが今後の課題と考える。現代社会に生きる私たちの生活やニーズは複雑で多様化しており、簡単には把握することがますます困難になっていくことが予想される。しかし、ケアの仕事は相手との信頼関係を築きながら相手のニーズに応える援助を行っていくものである。よって、相手の状態や状況、相手の生きている生活世界への理解や意味を見い出す「気づく力」が今後、ますます求められていくだろう。

引用文献

- 1) M. M. Leininger 稲岡文昭訳『レイニンガー看護論』医学書院1995, p.4.
- 2) Watoson J. 1988 稲岡文昭監訳『ワトソン看護論—人間科学とヒューマンケア』医学書院1992, p.109-110.
- 3) 社団法人日本看護協会『看護にかかわる主要な用語の解説—概念的定義・歴史的変遷・社会的文脈』2007, p.13.
- 4) 金圓景「『介護』から『ケア』へ：ソーシャルワーカーによる認知症ケア」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』2016, p.145.
- 5) Anne J.Davis and Marsha Fowler, 和泉成子訳「文献に見られるケアリングとケアの倫理：明らかになっていることと問いかけが必要なこと」小西恵美子監訳『看護倫理を教える・学ぶ倫理教育の視点と方法』日本看護協会出版会2008, p.168-169.
- 6) 佐藤聖一「看護におけるケアリングとは何か」『新潟青陵学会誌』第3巻第1号2010, p.16.
- 7) 飯岡由美子・長谷川美貴子「ケア専門職における共感性とバーンアウトの関係性」『淑徳大学短期大学部研究紀要』2017, p.137.
- 8) Mayeroff M. "On Caring" 1971, Harper & Row, 田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版, 1987, p.13.

- 9) Mayeroff M. 前掲書 8) p.18.
- 10) Florence Nightingale Notes on Nursing 薄井坦子, 小玉香津子監訳『看護覚え書』現代社 1980, p.213.
- 11) Florence Nightingale 前掲書10), p.213.
- 12) Erich Fromm, "The Art of Loving" Harper & Brothers Publishers, New York, 1956, 鈴木晶訳『愛するということ』紀伊國屋書店, 1991, p.48-49.
- 13) Virginia Henderson "Basic Principles of Nursing Care" 湯楨ます・小玉香津子訳『看護の基本となるもの』2006, p.13.
- 14) 谷垣静子他「看護学生の共感性の特質」『京都大学医療技術短期大学部紀要第15号』1995, p.48.
- 15) 松村由紀他「看護コミュニケーションプログラムの効果検証」『日本看護学教育学会第20回学術集会講演集』2010, p.198.
- 16) 想田和弘『なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか』講談社現代新書2011
- 17) 「渚のふたり」公式サイト<http://nagisanofutari.jp/> イ・スンジュン監督インタビュー
- 18) 鈴木敏恵『ポートフォリオとプロジェクト学習』医学書院2010, p.4-8.
- 19) 鈴木敏恵 前掲書18) p.15-19.
- 20) 鈴木敏恵 前掲書18) p.15.
- 21) 鈴木敏恵『ポートフォリオ評価とコーチング手法』医学書院2006, p.8.
- 22) 鈴木敏恵 前掲書21) p.8.
- 23) 鈴木敏恵 前掲書21) p.38.
- 24) 鈴木敏恵 前掲書21) p.62.
- 25) 鈴木敏恵 前掲書21) p.9.
- 26) 鈴木敏恵 前掲書21) p.9.
- 27) 長谷川美貴子「ケア概念の検討」『淑徳大学短期大学部研究紀要第53号』2014, p.131.

参考文献

- ・田村由美他『看護の教育・実践にいかすりフレクション』南江堂 2014.
- ・中井俊樹他『授業方法の基礎』医学書院 2017.
- ・目黒悟『看護教育を創る授業デザイン』メヂカルフレンド社 2011.
- ・前田泰樹『心の文法』新曜社 2008.
- ・近森芙美子『感性の看護論』医学書院 1985.
- ・黒山社編『日常と不在を見つめてドキュメンタリー映画作家佐藤真の哲学』黒山社 2016.

注

- 注1) 映画鑑賞の教材化について検討している先行研究は語学教育が多い。ケア領域においては精神・老年看護学領域でみられるが、本論文の問題関心と同一のものは見当たらない。たとえば、小山敦代他『『老年に関する映画』の教材化検討』『看護教育Vol.49 No.5』2008, p.428-433では、14本の劇映画の検討を行っており、対象理解や時代背景理解を深める目的の研究である。鯉坂由紀他「映画『ジョニーは戦場へ行った』を教材にした『コミュニケーション技術』の学生の学び」『京都市立看護短期大学紀要第32号』p.41-51は劇映画の鑑賞を取り上

げ、映像の追体験から①コミュニケーションの意味を理解する、②コミュニケーションの構成要素を理解する、③言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションを理解することを目的としている。眞鍋知子他「看護学生と社会人の死生観の比較」2016, p.87-96は教材化の研究ではなく、社会人と看護学生の死生観の違いを明らかにする研究の中で、ドキュメンタリー映画を活用している。

注2）看護学生における看護実習において、実習前後の共感性の変化を明らかにする谷垣静子調査研究によると、8ヶ月間あまりに及ぶ病棟実習（3年生）の実習前後において、共感性を示す5つの因子構造はほぼ同様で明らかな差はないという結果が出ている。また、介護学生における介護実習での調査研究においても、「実習を体験することで共感性は高まるであろうという仮説をもとに共感経験尺度（改訂版）による調査を行ったが、有意ととれる変化はなく、むしろわずかではあるが、数値は低下した」（奥田眞紀子「介護福祉士の養成課程における共感の理解に関する一考察」『奈良佐保短期大学紀要第15号』2007, p.30）という結果も提示されている。

注3）分析方法はSCAT（steps for coding and theorization）を用い、データの収集、語句の抽出・切片化、説明するためのコード化を行い、理論の生成を目的とする帰納的手法をとっている（大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要54（2）』2007 p.27-44）。質的研究は解釈が主観的であることから一般化の課題が指摘されているが、質的研究も量的研究と同様に科学的な理論やモデルをもたらす研究法の一つ（高木廣文『質的研究を科学する』医学書院2011）であり、今回のテーマのような「気づく力」への探求においては質的研究が適していると考え選択している。